

# 『怪文書』と『われらが不満の冬』をめぐる諸問題

塚 田 眞 幸

一、

これまでの人生で一番成功した作品は何か、と尋ねられたS・ハイムは、『怪文書』かな、と答えている。<sup>①</sup> 作者自身が成功作だと自負するこの中編小説は、一九七〇年にスイスで出版された。なぜスイスかといえば、もちろんDDRでは出版許可が下りなかったからである。

さて、ドイツ統一後の九二年に出版された評論集『フィルツ』の中の一編「思考のパターン」でハイムは、DDRがあのように簡単に崩壊してしまったのはなぜか、と問うて、支配層やその取り巻き連中の頭の中には、あらゆる事が前提条件から推論をへて、その後の当局の行動を支配することになる表向きは論理的な結論へといたる、一定の思考のパターンがあったことを指摘した。<sup>②</sup>

そうした思考過程を最も端的に表わしているのは、ごく普通の公的機関の文書類で、それらはこの体制の日常を暴露し、体制崩壊の本質的な理由を見きわめるのに大いに役立つとして、変革後に入手できたある文書を詳細に紹介、分析している。そしてDDRという体制の権力機構のある種の精神構造を明らかにし、ひいてはそれがDDRに特別な振舞いではなく、むしろあらゆるその種の集団の本質に根差すものであることを指摘した。

さて、その分析に使われている文書というのが、ハイムの小説『怪文書、もしくは女王対デフォ』の鑑定書である。鑑定書とはつまり、この小説を印刷し、出版していかどうかを当局に伺いたてるための、言ってみれば出版社による事前検閲なのである。

この小説『怪文書』は、その完全なタイトルからも見てとれるように、英国のダニエル・デフォーが書いたある政治パンフレットが罪に問われ、一七〇三年にロンドンの街頭でさらし台に立たされた一件の顛末を描いた歴史小説である。

だが、確かに体裁は歴史小説の衣裳をまとうているとはいえ、小説を書くとはその時代を描くことだ、というハイムが、単なる歴史小説を書いたと受け取る者はいない。この小説を読んだ鑑定人もその一人であった。これはDDR当局者を揶揄した風刺小説であり、当局にとっては文字通りの怪文書である、と鑑定したのである。その結果はもちろん、DDR内での出版は許可されなかった。

そしてこの鑑定書の思考方法が、『怪文書』で批判されているDDR当局の思考方法そのものであり、そこに描き出される行動パターン、すなわち七六年のビーアマン国外追放事件の際に、ハイムに対してなされた密告、心理テロ、脅しのメカニズムに再現され、ついには小説『コリン』<sup>③</sup>の西側での出版に際して示された執拗なまでのいや

がらせ、つまりハイムの思想内容を罪することができないので、かわりに形式的な法律違反、奇妙なことに外国為替法違反で罰金刑に処するという、当局の真意が見え見えで、ここまできると笑止の沙汰ともいえる思考・行動パターンは、すでにこの『怪文書』で完膚無きまでに批判されていたのである。

そういう意味でも、ハイムの文学歴のなかで避けて通ることのできない作品『怪文書』を少し詳しく分析・検討しておくことは、ハイムの思想を押えておくためにも必須要件であろう。

## 注

- ① Die Schmähschrift oder Königin gegen Defoe. Gesammelte Erzählungen. Werkausgabe Bd. 11. btb 1998. 『怪文書もしくは女王対デフォー、——ジョージア・クリーチなる者の手記による物語』「神奈川大学評論」一九九一年一〇号一八二頁以下塚田訳。以下の引用は拙訳による。 Regina General/Wolfgang Sabath: Stefan Heym. Elefanten Press 1994. S.137.
- ② Denkmuster. filz, Gedanken über das neuste Deutschland. C. Bertelsmann 1992. S.17ff.
- ③ Collin. C. Bertelsmann 1979. Werkausgabe Bd.10.

## 二

この作品『怪文書』の構成から見て行くことにしよう。

まず、この作品には前書きがついている。第二次大戦中の一九四四年に、ハイムはロンドンで、ミス・アグネス・

クリーチなる女性から、数百年來クリーチ家の所有になる古文書類を一晩借り受け、翌日返却に出向いたところ、家もかの女自身も消え失せてしまっていたという。

そこでハイムとしては、ミス・クリーチの先祖の残したこれらの古文書に、編集者としてはほとんど手を加えず、ただ単語のつづり方を現代風に改めたり、略語をもとの語にもどしたりしただけで、ドイツ語へ翻訳するにあたって、英語の原文のスタイルに従うよう心がけた、というのが前書きなのである。<sup>①</sup>

そもそも、この前書きの内容自体がさもありなんとと思われる内容である。米軍の心理作戦将校としてノルマンディー上陸作戦に参加したハイムが、四四年にロンドンにいたとしても不思議はない。またミス・クリーチの家がロンドン空襲で焼け落ちてしまったということもありうる。

そしてこれら古文書に編集者としてほとんど手を加えていないという設定も、非常に巧みである。これによって、以下の本文における言説も、あくまでクリーチ家先祖の言説であって、ハイム自身のそれではない、という前提ができあがる。しかも、それを補強するために、英語の原文のスタイルに従って翻訳したとあれば、この前書きに言われていることは事実起ったことなのだ、と思い込んだ読者もいたことだろう。ところがこれが全くのフィクションであることが、作者の口から明らかにされている。<sup>②</sup>

ハイムがこうした前書きを置くことによって、この作品全体をあたかもドキュメンタリー・レポートのごとくに仕立て上げたのはなぜか。もちろんできれば当局の目をごまかしてDDR内での出版を目論んだのは明らかであるが、この作品は一九六八年八月半ばから九月末にいたる六週間で書き上げられている事実注目したい。

六八年のこの時期といえ、チェコスロヴァキアの改革派による「プラハの春」に象徴される民主的諸改革の動

きが、ワルシャワ条約機構軍によって、まさに潰されつつあった時期である。それにDDRでの六五年一二月のSED第一一回中央委員会総会における文学・芸術戦線に対する当局の一斉攻撃、特に名指しで非難されたハイムとしては、これら当局側の動きを組み合わせると、もはやストレートな物言いではなく、自己韜晦のスタイルを使つてでも、言うべき事は言っておく必要があると感じたことであろう。この作品が第一一回中央委員会総会の批判に対するハイムの返答だといわれる所以である。そういう訳でハイムは、デフォアの口を通して、徹底した権力者批判を展開した。

次に本文であるが、これもクリーチによって書かれたデフォアに対する訴訟の数か月間の日記という体裁がとられている。もちろん日記であるからには個人の心情が色濃く盛り込めるといふ利点に目をつけたからであろう。一七〇二年一月一八日から一七〇三年八月三日までの七か月半のうち、二二日間の出来事が、クリーチの目を通して語られている。ここでこの作品の粗筋をごくかいつまんで見ておこう。

ダニエル・デフォアは一七〇二年に匿名で『国教徒処理対策案』、ドイツ語でいえば『偏向者処理の一番簡単な方法』という怪文書を出版した。「偏向者＝Abweichler」は、DDRの用語では、SEDの路線からはずれた者、すなわち体制批判派の者たちを指す。この一語で、ハイムの意図がわかる者にはピンとわかる仕掛けである。

物語りの語り手である「わたし」は、ジョージア・クリーチという名の架空の人物であるが、イングランドのアナ女王陛下の政府の南局に勤める次官ノッティンガム伯爵の、今日でいえば個人秘書官である。クリーチはこの怪文書の匿名の作者を突きとめ、追及するよう託されている。

歴史上のダニエル・デフォアは実際にそのような怪文書を書いて、支配的な教会のドグマを、ごくわずかに誇張

することで、その矛盾を論証してみせた。支配的教会とは何を指しているか、ハイムの場合自明であろう。

そしてミスター・クリーチは、まもなくかれをその小冊子の作者として突きとめ、逮捕とかれに対する裁判手続きを指示する。デフォーは連続三日間、ロンドンのそれぞれ異なる三つの広場でさらし台に立たされるといふ有罪判決を受ける。さらし台に立たされるといふことは、罪人が国民の支持がない場合には、生命にかかわる処置なのである。

デフォーの場合には、ロンドンの市民たちはさらし台に立った男を花輪で飾り、身動きできないよう横木に頭を乗せて立っているこの男のために万歳を唱え、その足もとでは、当局によって禁じられたかれの小冊子の新版が、かれの最新の作品『さらし台賛歌』とともに販売される。その作品では作者によって、本来ならかれの代りにさらし台にかけられるべき者は誰かが列挙されていた。つまり「株式仲買人や相場師、教会の頭職にある者、やくざな法律家たち、それに無実の者を死ぬほど追い回すよう仕込まれた政府のデカども！」である。

最終章の八月三日、さらし台の下から敷石を投げようとして、後頭部を殴られて失神していたクリーチは、デフォー対女王の件の処理に失敗したとして、ノッティンガム伯から身をひくようにといふ手紙を受けとる。詰め腹を切らされたのである。

## 注

①『怪文書』一八三頁。Werkausgabe S.195.

② Dichtung und Wirklichkeit, Einmischung, C. Bertelsmann 1990. S.95f. Werkausgabe Bd. 12. S.657.

この作品を現存社会主義のDDRに関連づけずに、一編の歴史小説として素直に読んでも、その価値は十分にあり。個人の言論の自由と尊厳を守ろうとするデフォアの闘いを、ロンドン市民との連帯において展開し、他方で権力の側となりふりかまわぬ対応ぶりは、どの時代にあっても変わらぬ事を納得させて、小説としてのまとまり、最後の落ちのつけ方も見事としか言いようがない。

だがしかし、DDRの出版社の小説の鑑定人、原稿審査係としては、そんな事も言っていられなかったであろう。ハイム原稿審査係の目の付け所から、かれが何を問題にし、何を恐れ、何を阻止しようとしているのか、ひいてはかれを通してDDR当局の精神状態がいかなる状況にあったのかを見ていこう。

まず問題なのは、この鑑定人がデフォアの『非国教徒処理対策案』の存在を知らないということである。デフォアの専門家でなかったとしても、文学の鑑定人を勤める者が、関係する文学史の中にこれを探し出せなかった、というのは怠慢である。それに比較的新しい英語の辞書にさえ、現代ドイツ語の造語である「偏向者」に対応する適切な概念が記載されていない、と言っている点である。

たしかにDDRのエンツィクロペデー社の独英辞典（一一版、一九七〇年）には、この見出し語（Abwetchler）はのっていない。また六巻本のアカデミー社版「現代ドイツ語辞典」（七版、一九七四年）にもっていない。西独のドゥーデン六巻本「大ドイツ語辞典」（一九七七年）には、「その時の党指導部によって確定された政治路線なしは主張された見解から逸脱した人物」と詳しく説明されている。

つまり、DDRにあっては、そもそも党路線からの離反者、逸脱者などあってはならず、また認めるわけにはいかない、ということが辞書の表記ひとつにも表われているということだろう。ちなみに西のランゲンシャイト社のポケット版独英辞典にさえ、Abweicher=deviationistと出ている。

さて、こうした二つの前提に立って論理を展開するとどうなるか。

「作家シュテファン・ハイムは自らを、『文学的思考の絶対的自由』という基盤に立って、作家デフォーという人物と同一視しており、この立場を、かれの造形したような狭了で、頑迷な国家と教会の代表者たちに対して擁護している。この本はしたがって、比喩的に、象徴的に理解されるべきであり、要するに悪意に満ちたあてこすりや関連づけのひそんでいない行は、一行たりとない。ハイムの『誹謗文書』は、言葉のごく本当の意味で誹謗の書、われわれに反対する誹謗文書である！」<sup>①</sup>という大結論が導き出されるのだ。

当然ハイムにとっての問題は、ダニエル・デフォーが書いた『非国教徒処理対策案』の歴史的背景、すなわちトリー党強硬派ならびに高教会派の聖職者による、非国徒を排除、処罰するべく、激烈で容赦のない扇動的説教がきたてる一般民衆の動揺、および初期資本主義のイングランドの社会的苦境ではない。これら歴史的事実は、別の主題をカムフラージュするための偽装だということになる。

その隠された主題とは何か。それは、SEDとDDR政府、特に六五年の第一一回中央委員会総会に関連して、党の文化政策を攻撃することである。

文学は、作者の生まれた時代の、作者の体験、状況の形成された歴史そのものであり、たとえ別の時代を語ったとしても、それは自分の時代なのである。<sup>②</sup>とする作者ハイムの文学観からすれば、この鑑定人の所見はたしかに正

しい。ハイムも認めているように、一七〇三年のロンドンの出来事と、一九六五年のSED第一一回中央委員会総会の時期に、ハイムをふくむ何人かの作家が陥った、むしろ茶番じみた紛争の間には、明らかに対応関係がある。だからこそハイムは、デフォーとかれの怪文書の引き起こした結果について書く気になったのである。<sup>③</sup>

ハイムの政治的センスの鋭さについては、すでに実証されているが、この場合、この両者に対応関係のあることを見抜き、作品に仕立てることができないようでは作家とはいえない、というのがハイムの立場である。社会主義作家の場合、あることに対して沈黙を守るということは、それ自体ひとつの立場の表明である、つまりそれを黙認したということなのだ。<sup>④</sup>ともハイムは言っている。

そうだとすればこの場合は、低級な政治屋どもに虚仮にされてたまるか、という意思表示なのである。『怪文書』本文の中でデフォーは、「そして政府当局の馬鹿者どものやることなすことを徹底的に描き出して、かれらを自らの下らなさのなかで溺死させること以外には、もうこれ以上何もする必要がない、とわたしは悟ったのです」<sup>⑤</sup>と胸のうちを明らかにしている。ハイムもよほど腹に据えかねたのであるろう。

こうしたデフォー／ハイムの本音を読めば、鑑定人でなくとも、「政府の馬鹿者ども」とは誰のことか詮索したくなるというものだ。当然鑑定を職とする者はこれを明らかにして、このような不埒な小説に出版許可を与えないよう判定せねばならない。その判定の仕方はどういうものであったか。

「背が高くてやせ衰えた」<sup>⑥</sup>卿は、「かれのうすい下唇をかんでいる」という表現から、文化・イデオロギー担当のクルト・ハーガーであり、肥育豚のロビンことロバート・ステファンズは、ヘルマン・アクセンだという。たしかにクルト・ハーガーはうすい下唇をしているし、ヘルマン・アクセンは、背が低く、ふとっている。「秘密諜報機

関の財源」をうごかせるとなると、大蔵大臣ゴドルフィン卿は明らかにエーリツヒ・ホーネツカーの人柄を体現しているようだ。<sup>⑥</sup>

このような人当てゲームなら、多少なりとも内情に通じている者なら、いくらでも言いあてることができるであろう。われわれ素人でさえも、例えば、デフォーとの交渉役に選ばれる老ウィリアム・ペンには、のちにビーアマン事件の際にもその役割をになった、ホーネツカーの古い友人で作家のシュテファン・ヘルムリーンが凝せられていることくらいは推理できるのである。だが、語呂合わせや体形、人柄による人当てゲームが、この作品のテーマではもちろんない。

ところがこの鑑定人は人当てゲームからさらに進んで、数の象徴的意味を探って、これが第一一回中央委員会総会を攻撃しようとするハイムの策略の証拠だといひ出す。

「年号の一七〇三年の、この本のストーリーの主たる時期の桁数字の和は一一（第一一回総会である！）になる。それに月日の日付けにおいても、桁数字の和の常に一一に近づけようとしている（八月三日＝一一、一月一〇日＝一一、四月七日＝一一等々）。」<sup>⑦</sup>

これも確かに鑑定の仕方のひとつではあろう。しかし完全にSEDサイドからの機能主義的鑑定のひとつであつて、文学それ自体の評価、鑑定とは、とても言えない、その目的はただひとつ、「所見を求める出版社と文化省が、作家デフォーのアンナ女王の政府に対する勝利を描いた物語り（これが主題である——筆者）のなかの、かれの（鑑定者の）研ぎすまされた本能が見抜いた悪意が、回り道をしながらも印刷されて、何も知らない東独の読者の頭脳に行きつくのを何とか防ごう」<sup>⑧</sup>というのである。

その原動力となるのは、『怪文書』の本文中で、女王の開院式の式辞草案を書くノッティングガム卿の言葉に、はつきりと表わされている。

「わたしが思うに、過度な自由を制限するためのいくつかの新しい法を定めることは、公共の利益だったでありましょう。その自由とは、スキャンダラスなパンフレットや怪文書を出版し頒布するにあたって慣わしになっているものであります。しかし少なくとも既存の法の枠内で、皆さんが全員、各自の持ち場で、そのような有害なる陰謀を阻止し、罰するために、あらゆることをなされるであろうと思っております。」<sup>⑨</sup>

今となつては悲しみさえさそうが、数にまでその象徴的意味を求めねばならぬほど、この鑑定人は、右に言われていることを忠実に遂行している、といえるのだ。ハイムも評している。警察の規範からいえば、誰もが始めから疑わしいものだが、秘密警察的綿密さが、ふだんならきつとしっかりした分別を持っているのに、社会主義に忠実な市民たちの思考と感情を倒錯させ、かれらの熟慮の結果を馬鹿げたものにしてしまう様子を、この男はこれ以上にうまくは描きだせなかつたであろう、と。<sup>⑩</sup>

「文学の道化たちが本当の厄介事になりはじめ、政治家を、銃で撃つのと全く同じに、辛辣な筆一本で簡単に失脚させることができる時代にはまり込んでいる」<sup>⑪</sup>と感ずる権力者たちの不安は、果てしない。したがってその元締めたるノッティングガム卿にとって、デフォー／ハイムのような輩は、「単に作家や風刺家、どんな権威をも疑つてかかり、既存の秩序を揺るがした人間、要するに悪魔の化身であったばかりでなく、それ以上に自分自身を脅かしているある陰謀の中心人物」<sup>⑫</sup>なのである。そしてそのありもしない陰謀という幻影を求めて、クリーチ、肥育豚のロビン、女王の秘密警察のアレンやダグリー、密告屋のフィニーといった手合いが全国を駆けめぐらる。

そしてかれらの遣り口といえ、密告屋の正体をばらす、と言って証言を引き出す、刑事訴追を免除する、との条件を出して人の名を聞き出す、人を尾行し、その家を監視する、諜報機関の資金により、密偵、秘密警察、お巡り、役人を大動員する、怪文書を公開で焼却する、怪文書の海賊版を出版させて、経済的に締め上げる、本人に一・五倍の買収額を示してまで陰謀の一味徒党の名を言うようにせまる、保釈保証人の身元調査をする、と要するにしたいほうだいなのである。

にもかかわらず、陰謀の正体をつきとめることはできず、さらし者にしたはずのデフォーは、逆に市民たちの大歓迎を受け、英雄に祭り上げられてしまう。そしてデフォーの「さらし台賛歌」が読み上げられ、「幻想を罰するために創られた強大なる国家機構」<sup>⑬</sup>を始めとして、「おぼつかない手でわれわれを指導する政治家ども、株式仲買人と投機家たち、教会のおえら方たち、法のならず者、ほら吹きども、国家免許を受け、舌先三寸でどんな犯罪をも証言する輩、そして無実の人びとを死に追いやるよう仕込まれている政府のポリ公ども」が市民たちの前で嘲笑され、「やつらに言ってくれ、かれを処刑台に送った連中は、われらの時代の恥辱だ！」とまでこき下ろされるのである。

国家の感じるこうした不安は、常に大小の悲喜劇を引き起こすが、その不安とは結局は幻想であり、ついには幻想それ自体によって罰せられる、という図式は、何も一八世紀初頭のイングランドに固有のものではなく、どの時代、どの体制にあっても、その本質に根ざすものであったことは、世界の歴史が示している。DDRが消滅し、ソ連さえもが崩壊した。マッカーシズムのアメリカも、コムニズムの浸透を恐れてインテリを弾圧し、ヴェトナムに手を出し、手ひどくしっぺ返しを食ったではなかったか。

ハイムは「そしてそのヴィールスは今、この瞬間に、そして明日、明後日にも、まさに権力者たちのきわめて忠実な下僕たちや恭順な信奉者たちの間に広まっているのではないか……すっかり身を引き締めておきたまえ、諸君、こうしたことは、また始まるのだから。」<sup>⑭</sup>と『思考のパターン』の最後を締めくくっている。

注

- ① Denkmuster, S.20.
- ② Literatur und Zeitgeschichte, Einmischung, S.111.
- ③ Denkmuster, S.22.
- ④ Stalin verärbt den Raum. Wege und Umwege, streitbare Schriften aus fünf Jahrzehnten. C. Bertelsmann 1980.
- ⑤ 『怪文書』110-111頁。Wa. S.225.
- ⑥ Denkmuster, S.21.
- ⑦ ⑧ ebd. S.22.
- ⑨ 『怪文書』110-111頁。Wa. S.218.
- ⑩ Denkmuster, S.21.
- ⑪ 『怪文書』118-119頁。Wa. S.204.
- ⑫ 同書110-111頁。Wa. S.226.
- ⑬ 同書110-111頁。Wa. S.243ff.
- ⑭ Denkmuster, S.23f.

## 四、

さて、ハイムは九六年に『われらが不満の冬』<sup>①</sup>という、シェイクスピアの『リチャード三世』第一幕第一景から借用したタイトルを冠した回想録を刊行した。回想録といっても、それは一九七六年の十一月一六日火曜日から一二月二四日金曜日までの三八日間の出来事を扱ったものである。

七六年十一月といえば、DDR文芸史のうえで忘れることのできない、詩人・歌手ヴォルフ・ビーマンの国籍剥奪事件が起きた月である。そしてその一六日という日が、まさにビーマンの国外追放が発表された日なのである。

ハイムのことであるから、後日の役に立てようと、さつそく手記を書き始めたとしても不思議ではない。最初のタイトルは、そのものずばりの「七六年十一月一六日」であった。

DDRの俳優マンフレート・クルークも同じ時期に書いていた日記を事件後二〇年を経た九六年に本にして公刊したが、<sup>②</sup>その中には、当時口外禁止とされていた、DDRのトップ指導者の一人と、作家・芸術家たちとの会見録が含まれていた。これは内情暴露ものとしては、非常に面白いものであったが、クルークは当時この日記をそのトップ指導者の一人、すなわちクルークの長年の友人で、のちの七八年にリビアでヘリコプターの墜落事故で死亡した政治局員で情宣担当（七一年まで）の長だったヴェルナー・ランベルツに見せていたようで、ハイムとしては、そのような日記にふくまれていたにちがいない様々な情報を公的な場所に提供することは、友人や同志たちにそれ相応の結果をとまなう裏切りと感じたようだ。<sup>③</sup>

ハイムも同じように、ピーアマンの追放からクリスマスにいたるひと月半の期間の思考、体験、人との出会いなどを、メモ、手記の形で日記として残していた。しかしこれら原稿をすぐに発表するのは危険だと考えて、多分安全だろうと思える場所に保管しておいたのだが、実はこれが全然安全ではなかったのである。<sup>④</sup>

ハイム家の家政婦で、国家保安省（シュタージ）の非公然協力者（IM）となったフリーダが、始めは屑籠の中の前稿を、のちにはフリーダの協力で合鍵を作ったシュタージが、すべての原稿を持ち出してコピーしていたのを、全然気づかなかった自分は馬鹿だった、とハイムは書いている。<sup>⑤</sup>そしてその後、シュタージのコピーをもとに作られたのが、『われらが不満の冬』なのである。

ベルリンはリヒテンベルク区のノルマンネン通りの旧シュタージ跡で、ひとは自分に関するシュタージの調査記録類を読むことができる。作家ハイムとその家族に関する記録は、五〇年代始めからDDRの崩壊までのものが残されていたが、「そのいくつかを読むだけでも、ぞつとするのに十分だった。われわれはガラス容器に入れられてピンで留められたかぶと虫のように暮らしていたのだ。そしてその一挙手一投足が興味深く述べられ、詳細に注釈がほどこされていた。」<sup>⑥</sup>つまり、個人のプライバシーもへったくれもまったくなかった訳である。たしかにこれでは、身の毛がよだつと言っても過言ではなからう。

かれらは「本の行間に、手紙や会話のなかに、路上で、酒場で、企業で、学校で、それに役所や駅のトイレで捜し求め、収集した。そして見つけ出したものに番号をつけ、記録し、はり合わせ、評価判定し、くり返し思索した。しかし、すべてがあんなにも簡単だったにもかかわらず、国内で何が起きつつあったのかがわからなかったのだ。（中略）かれらはほとんど、ほかのどこにもないほど完全に組織化され、官僚主義化されていたから、かれらの疑い深

い視線からのがれたものは、ほとんど何もなかった。しかしかれらは間違った場所に敵を探し、敵が実際にいた場所、すなわち自らの胸を、自らの脳のうちを探してみなかったのである。」<sup>⑦</sup>

ここには、「木ばかり見ている、森をみなかった」完璧な一事例がある。木の一本一本を詳細に観察、研究していれば、森の全体像がつかめると考えていた、とはとても思えぬが、にもかかわらず、やはりDDRの国民という森が動き出すのがわからなかった。「マクベス」の妖女も、森の動くのに気をつける、と言ったが、ホーネッカーも、森が動くことがあるとは信じていなかったであろう。DDR建国四〇周年の演説で、ベルリンの壁は今後一〇〇年は続くであろう、と言ったとき、かれは本当にそう信じていたにちがいない。またその演説のひと月後、壁は崩れ、一年もたたないうちにDDRという国そのものがなくなってしまおうとは、信じがたかったにちがいない。

森の動く時は恐ろしい。一旦動き出すと、もはや誰にも止めることはできない。『怪文書』の密告屋レミュエル・フィニーも、無頼の手下ども多数をさらし台のまわりに配置して、さらし台上のデフォーめがけて、腐った魚や卵、トマトにキャベツ、そしていくつかの敷石をも投げつけるべく待機していたが、肥育豚ロビンの進言にもかかわらず、クリーチの判断の誤りによって時期を失ってしまう。

「この男を捕まえるのに4か月半もかかったんだ、やつは手中にある。もう二、三分静かにやりすぎそうじゃないか。大衆は気が変わりやすいものだ。だから万歳と叫んでいる連中も、すぐにやつを十字架にかける！と叫ぶさ。」<sup>⑧</sup>「そうこうするうちに、印刷屋の徒弟の団が、「生粋のイギリス人」の著者の最新刊だ！」「さらし台賛歌だよ！」「それに『処理対策案』の新版もあるぞ！」とさらし台のまわりで売りまくり始める。そして一人の男がその『さらし台賛歌』の一節を街灯柱の上から朗読し始める。「ようこそ、幻想を罰するために創られた強大なる

国家機構よ！雄々しく勇氣ある者は、おまえに苦痛などかんじはしない、ただおまえを軽蔑するだけだ！」<sup>⑨</sup>そして著者が自分のかわりに、さらし台にかけたいと思っている連中を次々に読み上げていく。

こうして気のかわりやすい大衆のデフォー支持の方向が決定されてゆく。最後に「しかしながら法は、合法的な道具となりはて、悪人を厳しく罰するかわりに、正直者たちを怖がらせている限りは、無に等しい！」<sup>⑩</sup>と読み上げたところで、近衛兵たちに引きずり下ろされる。

だがその時、新たな声が起こる。「告げてくれ、これは誰だ、さらし台に立ち、ひどく責められてはいるが、全く恐怖を感じていない者は？かれの帽子につけられた紙片を読み、かれのしたことを全世界に知らしめよ！……：そしてかれらに言ってくれ、かれは大胆すぎたのだと！かれは語らない方がよいある真実を語ったのだ！かれらに言ってくれ、かれは高い所に立っているのだと、なぜならみんなの聞きたくなかったことを発表したからだ！……：だから見世物にされたのだ、率直にものを言うのは恐ろしいことなんだぞと……：」<sup>⑪</sup>

さらし台の囚人デフォーの声である。と同時にまたこれは作家ハイムの内心の叫びでもあっただろう。「かれらに言ってくれ、かれを処刑台に送った連中は、われらの時代の恥辱だと！かれに罪を見出すことはできないし、かれらにはかれのなしたことなど、なおのことではしないだ！」<sup>⑫</sup>

鐘が一二時半を打っても、クリーチの予定していたことは何も起こらない。「これではだめですぜ。人殺しやごろつきの見本のようなやつらを回りに集めましたかね、ニューゲート以外じゃめつたにひとつにまとまらないんですぞ。国民のこんな雰囲気逆らって声を上げたり、魚のしっぽを投げようとするやつなど誰一人いませんや。」「あしたしゃ口ひげにとまっているハエだつて、鼻をかすめないで当てますがね。しかし一撃でもって千人ものやつらを

倒す狙撃兵はまだ生まれていませんや。」フィニーの言葉である。

そこでクリーチは自ら片手に十分あまる敷き石をひとつ投げようと腕を振り上げ、こう叫ぶ。「そら、偉大なる作家にバラだ……」にぶい打撃を頭蓋に受け、星が降りそそいだのを覚えている以外に、クリーチが覚えているのはそれが最後だった。

この情景はベルリンの壁がくずれ直前の状況に、何とよく似ていることだろう。

ハンガリーが開いた国境の穴から人びとが国外に逃れ始め、その動きはライプツィヒやベルリンでデモを頻発させ、一〇月四日にはハイムやクリスタ・ヴォルフ、ハイナー・ミュラーなどの作家たちが、さらには少し前まで諜報機関の元締めをやっていたマルクス・ヴォルフまでもが、民主的改革の実行を求める声明を、さらし台ならぬ演壇の上から国民によびかける。こうして森が動き出してしまったのは、シュタージの手先であるフィニーのような手合いは、それこそごまんといたはずであるが、もはや森に向かって石は投げられないのである。ことにフィニーのように、状況を見きわめるのにたけた連中は、風見鶏よろしく保身のために変身をとげてゆく。ヴェンデヘルゼ（風見鶏）という言葉がはやった所以である。

それでもわれわれは、テレビのニュース画面で、デモ隊のかかげる横断幕を引きちぎろうと飛び出してゆく、この期におよんでなお忠誠心を示そうとするシュタージの手先きを何人か目にしたが、もはやそのような手合いが何人かいたところで大勢は変えられないのである。

「シュタージ、ラオス！（シュタージ出てゆけ！）」の声は、さらし台に向かって叫ばれる「デフォー！」「もつとやれ、ミスター・デフォー！」「おれたちはおまえの味方だぞ、ミスター・デフォー！」の声と同じなのである。

したがって、この森の動いているのを理解できなかつたクリーチが、失神から目覚めて肥育豚のロビンに「わたしの事故のあとで、ミスター・デフォーをしかるべく処置したと思うが？」と問いかけ、さらに「ミスター・デフォーは恥辱のかわりに栄光と榮譽のなかに立っていたとか、かれが群衆の標的のかわりに群衆の王であつたとか、それに暴動と異端はこういったやり方で罰せられるかわりに、報いられさえしたなど主張する気はとにかくないだろうな？女王の多くの使者たちはどこにいたのだ、司直の強力な働き手はどこにいたのだ？公然それに非公然のエージェントたち、密偵や密告者、乱暴者、ヒモの一团はどこにいたのだ？国が暴動という妖魔との戦いでやつらを頼りにし、情けをかけてたつぷりふるまつてやったというのに」と怒りを込めていぶかしがるが、これは怒る方が間違っている。常日頃国民に接しているフィニーらの方が、状況がよく見えていたのである。国民の上に立って、高見から全体を見下ろしていると信じていたノッティンガム卿やクリーチの見ていたのは、国民や国全体の実像などでは決してなく、大きくぼやけた虚像であつたにちがいない。

だからホーネッカーや、そのあとを襲つたエゴン・クレンツ、またシュタージの長エーリッヒ・ミールケやギュンター・シャボウスキーなど政治局のメンバーは、ベルリンの壁崩壊の前後、まさにクリーチの心境を味わつたことだろう。政治局会議でのかれらの責任のなすり合い、処置をめぐる右往左往ぶりは、次のロビンのセリフに正確に描写されているといつてもいいくらいである。

「あなたという人を失つて、政府じゅうがまるで指導者を失つたようでしたよ。ノッティンガム卿はこの件で、国璽尚書閣下やゴドルフィン卿とけんかになつたとか。つまり三人ともミスター・デフォーにだまされたとかされないとか、裁判を通じて女王陛下のお役に立つたとか立たなかつたとか、またミスター・デフォーの刑を三分の二

免除し、判決が不公正であったことを公に認める方がよかったとか、あるいは厚かましくもかれをもう二度さらし台にさらし、国教会ならびに政府をもう二度国民の前にさらし者にした方がよかったとか、あるいは軍隊を導入し、兵士たちに、惑わされている観衆の頭を殴りつけさせるのが一番ではなかったのか、とね。それに三人があれやこれやの問題を激論している間に、閣下方がどんな有効な処置をもまったくとられなかったので、この件は悲しむべき経過をたどることになったんですよ。」<sup>⑮</sup>

DDRも結局悲しむべき経過をたどって消滅していったことを思い返すと、ハイムのこの『怪文書』という作品は、それは強引すぎるといわれるかもしれないが、第一一回中央委員会総会の総攻撃に対して、昂然と反旗を翻した作品だったと同時に、二一年後の壁の崩壊、DDRの消滅という出来事を見事に予見する作品になっている、と言ってもいいのではなからうか。ハイムの言葉を引用すれば、「文学のあるべき姿にぴったりと合った創作に成功するならば、その時その文学は客観的現実として姿を現わすであろう」<sup>⑯</sup>まさにその典型的な実例が『怪文書』なのである。

### 注

① Der Winter unsers Mißvergnügens. Aus den Aufzeichnungen des OV Diversant. btb 1996.

② Manfred Krug: Abgehauen, Ein Mitschnitt und Ein Tagebuch. Econ 1996. これは一九七六年一月二〇日の午後、クルークの家で行われたランベルツと芸術家たちとの話し合いを、クルークが密かに録音しておいたテープから書き起こした前半部と、クルークの出国をめぐる七七年四月一九日から五月二〇日までの日記を収めた後半部とから成る。なお当時は、この話し合いが行われたこともその内容についても内密にするという合意がなされていた。一一一頁～一一二頁。

- ③ Der Winter..., S.8.
- ④ ebd. S.8.
- ⑤ ebd. S.8.
- ⑥ ebd. S.14.
- ⑦ Denkmuster, S.23.
- ⑧ 『怪文書』 一一一九頁。 Werkausgabe, Bd.11, S.242.
- ⑨ 同書 一一一〇頁。 Wa, S.243.
- ⑩ 同書 一一一一頁。 Wa, S.244.
- ⑪ 同書 同頁。 Wa, S.245.
- ⑫ 同書 同頁。 Wa, ebd.
- ⑬ 同書 一一一一～一一二二頁。 Wa, ebd.
- ⑭ 同書 一一二三頁。 Wa, S.247.
- ⑮ 同書 同頁。 Wa, ebd.
- ⑯ Dichtung und Wirklichkeit, S.95. Wa, Bd.12, S.656.

五、

ここで再び『われらが不満の冬』にもどろう。不満の冬といっても、実際はくそ面白くもない冬といったイメージであるから、ピーアマン事件をめぐるさまざまな不快な出来事の起きた七六年の冬は、ベルリンのあの陰うつ

な冬の景色と相まって、ハイム的心情をストレートに言い表したものであろう。ビーアマン事件の経過、およびそれをめぐる諸事情については、以前に別稿で取り扱ったので、ここでは繰り返さない。<sup>①</sup>ここでは、この作品で明らかになったシュタージの徹底した捜査、調査、介入の仕方、これがハイムをして身の毛がよだつと言わしめたやり方だが、そのほかに作家同盟幹部とのやり取り、友人、同僚たちにかかる圧力やいやがらせ、そうしたものを通じて、現存した社会主義DDRの権力者たちの存在が、『怪文書』に描かれた一八世紀初頭のデフォアの生きた時代、デフォアのこうむった厄災と何ら変わらないことを述べて、作品『怪文書』の持つリアリティーが、今もなおアクチュアルなものであることを明らかにしておきたい。

そもそもハイムという作家は、楽天的人間なのであろう。楽道家でなければ、くそ面白くもない冬を体験させられ、のちに作品『コリン』のおかげで、それに輪をかけたようないじめ、いやがらせ、罰金刑を受けながらもそれでもなお国内に留まることなど、とてもできなかったであろう。西へ移住した同僚たちに理解を示しつつも、できることなら国内に留まり、各人が各人のやり方でもって、状況を変えるよう努める方が正しいと思ったからだと言っただが、<sup>②</sup>これも何と素直な物言いであろう。

七六年九月にケルンでテレビのトーク・ショウに出たあと一〇月に、ハイムはハインリッヒ・ベルを訪ねている。その時ベルは、『ツァイト』紙にライナー・クンツェの『すばらしき歲月』の書評を書いたところだといって、ハイムにそのクンツェの本を押しやりながら、「何か君たちの身におきつつあるぞ」と言ったという。

それに対しハイムは、第一一回中央委員会総会以降、指導的同志たちも少しは学んださ、あれからもう一一年もたっているんだ、とはいえ、まるでついきのうのこのような気がしばしばするがね、それだけあの体験は決定的

だったのさ、と反論した。ハーヴェマン、ビーマンそれにオレに対する総会の席上での攻撃と、それに続く馬鹿げたキヤムペインは、ビーマンを有名にさせただけだ。やつはそればかりか皮肉な詩も作ってみせたさ。でも今でもなお確かにかれらをいらつかせるとはいえ、今じゃビーマンのことはかれらも話題にしない、だからクンツェについても騒ぎはしないだろうし、遅くもひと月もたてば、誰もクンツェの本について話もしないだろう。これに対してベルは、思い違いだけはするなよ、と警告し、ハイムは、今は違う時代に暮らしているんだ、と答えている。<sup>③</sup>

この対話のひと月もたたないうちに、ビーマンは国外追放され、クンツェは作家同盟を除名になったことを思うと、ここではベルの予言、警告が正しく、ハイムの判断が完全に間違っていたことはいうまでもない。

第一一回中央委員会総会に関しては、『怪文書』であれだけこてんぱんにやつつけてやったんだから、少しはやつらもわかっただろう、という自負心もあってか、判断が甘かったのである。楽天的で理想追及型の人間は、どうしても自分に都合いいように物事を解釈しがちである。一一年たったとはいえ、別の時代に住んでいたわけではなかったのである。シュタージはそうした人間にも容赦なく襲いかかる。

シュタージのハイムに対する作戦行動の様子は、『不満の冬』の序と追記部分に、シュタージ側の資料を使ってコンパクトにまとめられているので、それを借用しながら、身の毛のよだつといわれる作戦内容の具体例を見ていこう。

まずハイムに対する非公然協力員（IM）フリーダを獲得するのに使われる口実である。

わが国ではすべてが労働者と共に、労働者のためになされる。

わが国には相変わらず、自分が個人的人間だということを理由に、何か特別な存在であり、特別な権利を有し

ているにちがいない、と誤って思い込んでいる寄食者がいる。自分自身では社会主義社会の形成に参加することなく、特に労働者階級の費用で生活しようとする、個々の芸術創造者たちのさまざまな現象を指摘する。<sup>④</sup>

こうした会話を続けるうちに、フリーダは自らハイムについて語り出し、ハイムもかの女の考えでは、そうした芸術創造者のカテゴリーの一人だ、と言いつたのである。

建国期のDDRではあるまいし、今どきこんな理由で簡単にIMになることに同意するとは信じがたいが、それだけイデオロギー教育が徹底し、シュタージの説得術が巧みだったということであろうか。ハイムも『怪文書』のなかで、そうした芸術創造者たちの一生態を描写している。

「閣下も、ただで食べたり飲んだりできるどんな公的なレセプションにお出になっても、そういった連中にお会いになれますし、意地汚なく食ったり飲んだりしながらたえずあたりを見回して、誰がいったい自分らの才能に金を払ってくれるんだろうか、などとやっているのをご覧になれるでしょう。」<sup>⑤</sup>

家政婦という身分としては、そうした連中の存在を苦々しく思っていたとしても不思議ではない。人はこうして月々百マルクの手当にプレミア、そしてちよつとした個人的プレゼントといったささやかな餌につられて、また国家への奉仕といったちよつとした優越感に支えられてIMになってゆくのである。

そしてIMフリーダの任務範囲は、およそ次のように設定される。

ハイム家に存在する人間の政治的考え方と意見の確認。

ハイムの関係範囲、訪問客および祝い事の確認ならびにそれらの性格の評価。

作戦上興味のある到着する郵便物、文献、外国新聞、雑誌等の確認。ハイムの準備中の文学上の仕事の捜査。

特に西ベルリン、西ドイツあるいは資本主義の外国で発表しようとする仕事。

ハイムの住宅における書き机、紙くず籠、書籍の保管場所等を秘かに捜査して、人との結びつき、接触そして他の作戦上興味ある時機を示唆するものの入手。

ハイムの有罪で刑法と関連した行動の発見と、文書による証明に役立つ政治作戦上の他の処置を導入するための前提条件の創出。<sup>⑥</sup>

そしてこうした任務を達成するためにシュタージは、IMフリーダをして具体的にどういふことをさせるかという、一例としてあげられているのは、一九七四年七月八日から、ハイムが家族をつれてフランスに休暇旅行に出かけている間に、ハイムの日記メモを秘かに入手させ、それをフォトコピーして記録に残す。そして同じ日にIMフリーダをして、再び同じ保管場所にもどさせている。そしてIMに課されるのは、ハイムが休暇から帰ってきたあとで、それらの書類が少しでも動かされたことに気づいたか、あるいは別の疑いを抱いたかをチェックすることなのである。<sup>⑦</sup>

いや、私は何も気づかなかつたし、また別の疑いも抱かなかつた、とハイムは書いている。<sup>⑧</sup>

これらの業績によって、フリーダ・シュミッツ（本名）は七四年一〇月七日に、「われらが労働者と農民権力の強化と保安のために委託された任務を実現するにあたっての特別な成果、責任感あふれた活動、主体的行動ならびに高い個人的な出勤態勢に対し」国家人民軍功労メダル銅章、表彰状そして二五〇マルクを授けられる。またピーアマン事件期には、数多くの作戦上価値ある情報を入手し、ならびに重要な証拠書類を秘かに確保し、記録に残し

た活動に対し、七七年二月二八日の国際婦人デーに、二千マルク相当のテレビ受像機を授与され、表彰されている。要するにIMフリーダは、IMとしての本領を発揮して、大いにシュタージの期待にこたえたということだろう。またシュタージの担当将校の作戦指揮も見事だったといえよう。ハイムはこの作戦実施を当時全然気づいていなかったからである。従ってこれらの記録を読んだハイムが、ぞっとしたというのも無理からぬ話なのである。

そしてこの『不満の冬』で対象とされている七六年一月一六日のピーアマン事件発生以後の数か月、シュタージが事件後の進展の主導者の一人であるハイムに対して、大作戦を展開したのはいうまでもなからう。ハイムは追記でその作戦実施ぶりを二三頁にわたって紹介しているが、最後の結びの言葉をこう結んでいる。

「だがしかし天使は羊飼いたちに何と言ったか？おまえたち恐れることなかれ！と。こうした工作の構想を知った今となってはようやくはつきりしたのは、当時どんなに恐れたとしても恐れてしかるべきだった理由がいやになるほどであった、ということである。」<sup>9)</sup>

そのもつと恐れてしかるべきだったというシュタージによるハイム包囲工作は、ますます徹底さを増し、綿密と成ってゆく。ここで論旨に必要な部分、繰り返しや責任者名など省いて訳出してみよう。

七六年一二月二三日報告。ハイムは相変わらずピーアマン事件についての原稿に取り組んでおり、秘かに閲覧したところ、その原稿のタイトルは“一九七六年一月一六日”というのであり、七六年一二月二〇日にはすでに八五頁が書かれていることがIMにはわかった。

七七年二月一八日の報告。ハイムは“七六年一月一六日”の原稿を明らかに書き終わったことがIMから報

告あり。およそ二週間来この原稿の一部がもはやハイムの紙くず籠に見い出されず、ハイムは目下再び、以前に報告した健康問題についての原稿に取り組んでいることから、IMはそう結論づけている。これに関連してハイムは七七年二月四日に、ベルテルスマン出版社の編集者イングリット・グリムの訪問を受けており、この時以来“七六年十一月一六日”の原稿はもはや確認できないことから、グリムがこの原稿をBRDへ持って出た、とIMは推測している。

七七年四月の月例報告。ハイムはこの四月長い休暇をチェコスロヴァキアですごしたが、動員された作戦グループのIMによれば、ハイム夫妻は否定的敵対的活動ないし接触活動の開始を企てなかった。

ハイムの休暇旅行を利用して次の資料が秘かに短時間ハイム宅から持ち出され、記録に残された。

——ハイムの七六年五月から七七年二月までの日記メモ。

——ハイムの“七六年十一月一六日”の原稿のタイプコピー。

——ハイムの『コリン』の原稿の第一部。

記録に残された資料の一部は翻訳部へ送付され（当日記メモは英語で書かれていた——ハイム注）、“七六年十一月一六日”の原稿はポツダム⑩の法科大学へ評価を依頼した。

すでにこれ以前シュタージでは“十一月一六日”ないしは“われらが不満の冬”の作者をどう評価し、かれとかれの回りの人間たちをどのようにあつかうべきかが検討されており、その結果、次のような工作構想が確定された。

七七年一月一九日。

作戦関係書類（OV）「デイヴェルザント」（サボタージュ煽動員）に対する工作構想。その目的。

——刑法九七条（エスピオナージ）、九八条（情報収集）、一〇〇条（国家敵対的關係）、および一〇六条（国家敵対的煽動）に応じた国家敵対的關係、活動および行動を立証する。

——容疑者が資本主義国の出版社、マスメディアおよびDDRにおける外交代表部の協力者を通じて、DDRに敵対する目的を貫徹する際の拠点として利用されること、ないしは容疑者がこれらの人間を自分の敵対的目的を貫徹するために利用することを証明するもの入手。

——容疑者の意図と敵対的計画を早期に解明し記録に残すこと、ならびにその効果を阻止するための処置の導入。

——容疑者の政治的・イデオロギー的構想の明確化と確認。

——容疑者の関係する範囲の作戦的チェックと一層の解明。敵対的計画と意図を貫徹する際に関係する人間の役割の明確化ならびに容疑者の他の敵対的否定的勢力との協力關係の記録保存。

——孤立化し分解するための処置の実行と準備。

課題と処置

すでに入手した資料に基づいて、ハイムが、

——政治的利益あるいはDDR防禦のために秘密にされるべき事実、対象物ないしは他の情報を、その活動が反DDRあるいは他の平和を愛する民族に反対する帝国主義的諜報機関あるいは他の組織、施設、グループな

いし個人のために、収集し、提供し、あるいは漏らす（刑法九七条の犯罪構成の指標の要求に依じて）

——入手した情報を（右のような組織等の——筆者）活動を支持するために、収集し、かれらに引き渡す（刑法九八条の同文）

——（同）組織等と関係を持ち（刑法一〇〇条の同文）

——DDRの社会主義国家秩序と社会秩序を害し、あるいは反対するよう扇動する意図と目的を持って、

。誹謗的内容の文書を作成し、広める

。他の人間に（右の）秩序に反抗するよう勧める

。国家の組織と施設の代表者や活動を誹謗する（刑法一〇六条の同文）ことを、一層解明し、証明すること  
そのためには次のことが不可欠である

一・一 I Mフリーダを動員して、ハイムによって展開されている活動、特に外交代表部、DDRに信任状を持って派遣されている西側の通信員、旅行ジャーナリストと関係する活動、ならびに広い出版物、インタビュー、そして西側メディアと出版組織との共同での講演旅行におけるかれの意図を明確にすること

一・二 I M “ガリーナ・マルク”を動員して、これまでの信頼関係を利用し深めることで、ハイムの敵対的計画と意図、かれの政治的・イデオロギー的目的とかれの人との結びつきを明確にすること

一・三 I M “ラックス”を動員して、ハイムの居住範囲で、かれの行動、交際範囲を一層チェックし、解明すること、ならびに会合の確認をすること

一・四 省略

一・五 作戦上知られたハイムの関係サークルの中から、新たなIM候補者を啓蒙し、獲得し、再調査して動員することにより、

——ハイムの直接の工作と

——かれの作戦上重要な人との接触を、その関係システムに入り込む目的をもって解明すること

一・六 既存の、また新たに入手した作戦上の資料を分析して、ハイムの情報収集的活動の一層のヒントないしは疑いの根拠を明確にすること

一・七 西ベルリンとBRDから秘密手段を使って、ハイムに送られた郵便物の調査

一・八 ハイムあての短期間の国内郵便のチェックを動員して、DDR国内における敵対的・否定的勢力とのかれの結びつきを一層解明すること

一・九 第二本部と第二〇本部五局を作戦上の可能性から利用して、ハイムのDDRにおける英国、フランス、スウェーデン、デンマーク、英国、オランダ、西独の外交代表部ならびにDDR国内に信任状を持って派遣された西独、西ベルリンそして他の非社会主義諸国の旅行通信員、特にロイター通信社、『ニューヨーク・タイムズ』、西独の週間誌『シュテテルン』およびドイツ第二テレビの通信員との関係をチェックし一層の解明をすること

一・一〇 ライプツィヒのドイツチェ・ビュヒエライと情報・記録センターのアルヒーフを再調査して、これまでの個人イメージを拡大する目的で、ハイムの過去について一層のヒントを入手すること

一・一一 省略

一・一二第三四局のスペシャリスト一名を加えて、ハイムが暗号手段を所持しているかどうか調査する目的で、ハイム家の秘かな家宅捜査の準備をし実行すること

一・一三西ベルリンへの年金旅行の際とDDRのハイムを時々観察することによって、かれの移動経過とその解明と記録に残すことを含めて、かれの人との結びつきと接触をチェックし、確認すること

二、刑法九七、九八、一〇〇条に沿って、ハイムの国家敵対的活動を解明し、記録に残し、立証するために、優先的に西ベルリン、西独そして他の非社会主義国との作戦上知られた関係が、ハインリッヒ・ベル、イングリート・グリム、アンドレアス・ホップ、ハイナー・キップハルト（他に一二名省略——筆者）を対象に解明され、説得工作されねばならない。この関係サークルの人間がハイムへ、またハイムからの密使として活動しているかどうか、あるいは他に工作の方向に応じて、敵対的に登場しているかどうか、明確にされねばならない。

三、第八本部と調整して、西ベルリンと西独の人間を、敵対的活動へのヒントと入手した疑いの根拠を再調査するために、どこまで家宅捜査が実行できるか調べてみなければならぬ。

四、ハイムの否定的・敵対的芸術および文化創造者たち、シュテファン・ヘルムリーン、ギユンター・クレーネルト、ローター・レーアー、ウルリヒ・プレントドルフ、ホルスト・フツセル、ユレーク・ベツカー、クラオス・シュレズインガー、ベッティーナ・ヴェーグナー、ヴァルター・ヤンカ、ヴォルフガング・シュライアーとの作戦上知られている関係が、担当業務単位と調整のうえ、常にチェックされていなければならぬ。以下省略。

五、これまでに提出されている作戦上のヒントから出発して、ハイムの関係人物が、次の目的を持って別々に

作戦上で解明されねばならない。

——どの人物が、作戦上のプロセスにおいて、国家敵対的活動あるいは国民としての義務に違反したかを立証するという目的をもって説得できるか

——どの人物が、作戦上の人物チェックにおいて、プロセスを展開し、あるいはIMとして勧誘できるかという目的で説得できるか

——どの人物が、短期間でIMとして獲得できるかという目的で、すぐにも非公式に接触するのに適しているか

——どの人物が、作戦上の細分化と分解の過程に取り込むことができるか

それらの人物は以下の人物である。

インゲ・ハイム・ヴェーステ ハイムの妻

シュテファン・ハイム ハイムの息子

ドクター・ヴァルター・ベルツ ハイムとの関係

すべての今後作戦上で知られるようになるハイムとの接触とその関係サークルは、補足的に説得工作される。これら人物の啓蒙のために

。そのためにすでにいる相応しいIMの動員

。新たなIM/GMS（保安のための民間協力者）を確保すること

。省略

。写真と比較のための文書の入手

。作戦上の書類を作成し、一括書類を作ること

そしてそれらを基にして、今後の説得工作のための具体的な提案が提出されなければならない。<sup>⑪</sup>

一読してわかるように、ハイムの関係する範囲にはすべてシュタージの網が張られていたのである。西側の外交代表部から、通信員、友人たち、会合、インタヴュー、郵便物のチェック、東側の交友関係、暗号手段や西側の密使を含めて国家敵対活動に問えるかの秘かな家宅捜査、IMを使つて原稿を持ち出させてのコピー、その内容が刑法に問えるかの判定依頼、果ては一番身近な妻や息子、弁護士にまで説得工作が及ぼうとしていた。

ハイムが当時ちよつとでも軽率な行動を取っていたならば、バオツェンあるいはシェーンハオゼン刑務所にいたかもしれないほど、それほど危ない立場におかれていたわけだ。

もちろん電話の盗聴や郵便物のチェックを含めてシュタージの手が及んでいることは承知していたが、家政婦がIMで、原稿まで持ち出されて内容が分析され、記録保存されていたことなど、知る由もなかった。天使は恐れるな、と言ったが、恐れない方が無理である、との結びの言葉がハイムの心情を正確に写して余りある。

フリーダがIMとして取り込まれたのが、シュタージの報告によれば、一九七一年の四月二七日である。六八年に書かれた『怪文書』が七〇年に発表されているから、その翌年のことである。つまり『怪文書』が発表された直後から、当局はハイムをコントロール下に置き始めたということだろう。政府のおえら方を馬鹿呼ばわりし、徹底的に虚仮にした作品、しかも最後は問題の作家が、下されたさらし台の刑罰などもせず、国民と連帯し、女

たちの花束に囲まれて勝利を得る、などという作品を絶対に許すわけにはいかなかったであろう。建国後二〇年たったとはいえ、DDR当局に、自らを風刺した作品を出版させる度量はなく、ハイムが『怪文書』で描いた以上に、はるかに徹底して作者を追いつめようとした。作中のノッティンガム伯は「犯罪者の軍隊くらいで、ミスター・クリチ、既存の国家秩序は脅かされはしないよ。しかしこの反抗的な作家には当然ニューゲート入りしてもらおう。いいかね、ミスター・クリチ、やつをできるだけすみやかに収監したまえ」と言い放った。これが当時のDDRの上層部の偽らざる心情であつたろう。ハイムという作家の本能が、かれらの心情を言い当てたのである。だからシユタージがしゃかりきになったのである。

そういった意味でも、『怪文書』は第一一回中央委員改総会に対する回答といった生易しいものではなく、当局にたたきつけた挑戦状だったといつてよかろう。当局は受けて立ったからである。そして一年後ハイムの願う新時代は来ていずに、第一一回中央委員会総会の第二ラウンドとも言うべきピアマン事件が始まるのである。

### 注

①「ピアマン事件以後（上）——DDR批判派の動向——」『人文研究』（神奈川大学人文学会）七九号一九八一年および「現代DDR文学をめぐる二三の問題について——ピアマン事件以後（下）——」『人文研究』一〇〇号一九八八年。

② Der Winter ..., S.8.

③ ebd. S.19f.

④ ebd. S.9f.

- ⑤ 『怪文書』 一八九頁。Wa, S.203.
- ⑥ Der Winter ..., S.10.
- ⑦ ebd. S.11.
- ⑧ ebd. S.12.
- ⑨ ebd. S.222.
- ⑩ ebd. S.210ff.
- ⑪ ebd. S.215ff.
- ⑫ 『怪文書』 一九八頁。Wa, S.214.

六、

『われらが不満の冬』は、前章で扱った序と追記を除いて、七六年一月一六日から二月二四日までのさまざまな出来事を扱った一七九編の断片から成り立っている。日付けが入っているとはいえ、いわゆる個人的日記ではなく、例えば、ヘルムリーンから電話があった、となるとその内容のほかに、ヘルムリーンについての過去の思い出、人物評などの断片が続く。また政府のビアマン追放の公式発表とか、その再考を求める二人の作家が署名した声明、あるいはハイム個人のクンツェの作家同盟からの除名に反対する抗議声明といったドキュメント類も収められている一種の短いクロニクルで、もちろんいつか公表されることを念頭において書かれたものである。で

あるからこの作品の副タイトルも「作戦関係書類『サボタージュ煽動者』の手記から」となっている。

ここではその中から、ハイムや同僚たちが、作家同盟で、組織の党員会議で、あるいは党幹部との交渉で、どういふ立場に置かれ、何を認め、何を拒否し、何を妥協したか、要するに一八世紀ならぬ二〇世紀の女王対デフォーたちの戦いぶりの具体例をいくつか取り上げて見ていくことにしよう。

まず断片二六。一九五六年末。

ハイゼンベルクを中心にした原子物理学者たちが、原子力兵器の西独への展開を拒否したゲッティンゲン書簡を、東の新聞も報じたが、その中の「われわれはコムニストではないけれども」という言葉を省いたことを、重大な手抜きだと自分のコラムで批判した。それが直接中央委員会の情宣部を攻撃することになるとは知らずに「編集上の美化」だと語ったところ、自分に対するミニキヤムペインが始まったが、反論は許されず、「ベルリン新聞」の編集長と副編集長が中央委員会に呼び出され、地位を失う。そこで当時の報道の責任者の一人であるホルスト・ズインダーマンに電話して、こんな状況ではコラムは書き続けられない、と言ったところ、かれは興奮してはつきりと「間違いについての議論なんてするつもりはない」と本音を語ったという。<sup>①</sup>

つまり党は誤りを認めないのである。のち七六年になっても、「誤りについての議論はしない」という立場をつらぬくが、これを言いかえれば「党の言うことは常に正しい」のか。現実に誤りのない人間、誤りのない組織なんて存在しないのは自明ではないか。

六二年一月三十一日付けの右と同名のタイトルを持つ当時未発表の断片でハイムは、

「主張されたことを白地で受け入れることを要求するのは、信仰を要求することである。(中略)人間は、安逸からではあるが、信じられるものが十分に声高に、権威を持ってかれらに提供されることを前提とすれば、信仰に傾きがちである。人間の信仰は、現実との矛盾をも耐えて生き残る——聖マリアの純潔信仰は一例である。この純潔信仰は、党の(党内の比較的小さくはあるが、比較にならないほど強力なあのグループでの「つまり政治局を指す——筆者」と理解せよ)無謬性信仰とは、処女マリアは生産過程に介入しないことで区別がつく。たとえば、日々の糧であるパンやベーコンがその点マリアの無垢受胎に左右されるとすれば、その信仰は急速に失われてしまっただろう」と看破した。<sup>②</sup>

あらゆる生産過程に介入した党の無謬性信仰は、ソ連共産党第二〇回、第二二回党大会で大いに傷つけられはしたが、八〇年代まで生きのび、その後半になってとうとうその内部矛盾に目を向けざるをえなくなった。グラスノスチ、ペレストロイカを言い出したとたんに体制そのものまで崩壊してしまったのは、記憶に新しいところだ。

断片五二。<sup>③</sup> 俳優マンフレート・クルーク宅での党幹部ヴェルナー・ラムベルツらと作家たちの会談。

(ビーアマン追放の)決定は二月二二日のビーアマンのケルン登場と、一六日の決定の発表の間に実際に——週末を別にすれば、二四時間の間の決定なのか？

政府の決定である。われわれは自由に選ばれた政府であり、落下傘で中央委員会に飛び下りたのではない。ビーアマンのケルン登場に基づいての決定である。そこでかれがしゃべったことは、屈辱的で敵対的なものそのものだった。

ビーアマンは、確かに国のある種のことは非難したが、全体としてはD D Rを擁護した。それにかれの歌は周知の歌だ。それを歌ってほしくなかったなら、なぜかれを西へ行かせたのか、つまり罨じゃないのか？

中略

この決定はビーアマンの登場に基づいて下されたものだ。

クルーク「おまえの言うことなど信じるか、おれたちをアホだと思ってやがるんだろう。」

断片五三。<sup>④</sup>六八年夏。フランク・バイヤー監督作品「石の痕跡」プレミア上映の際に、観客の中にそれとわかる似たような腕つぶしの強そうな「サクラ」の団がいる。

スクリーン上のクルークが、一人の警官を池に投げ込むと、サクラの団が騒ぎ出し、上映が中断される。第一一回中央委員会総会のおかげでこの映画は禁止となり、バイヤーはその後数年映画を作れなくなる。

断片五四。<sup>⑤</sup>クルーク宅での続き。

中略

われわれには何千通もの厳しい手紙が届いている——ラムベルツが始める。

誰からの？誰かが非難する。

：：どれだけ長く、君たちを守ってやれるかわからないぞ、とラムベルツが終える。

何から守るってんだ？とクルーク。

勤労者たちの正当な怒りからさ、とラムベルツ。

クルークが声をはり上げる。やつらがまた石を投げつけるってんなら、「石の痕跡」プレミアの時の同じツラ

は見たくねえぜ！クラオス・シュレズインガーが仲裁しようとする。作家たちの書簡に連帯する人びとの署名も、ストップするのはむずかしい。住民のあらゆる層から自主的にやってくるんだ。

ラムベルツは左隣りを意地悪そうに見て、おまえが自分で署名を集めてるんだろう！そしてシュレズインガーの方に親しそうに腕を置きながら、皮肉っぽく「ギョームみたいなのは一人だけじゃないぜ。」

中略

アダメック(テレビの総支配人)。なぜ声明が西側の通信社に送られたのか。これは由々しい問題なんてもんじゃない。どこにわれわれの地位や党への信頼があるというのか。

クリスタ・ヴォルフ。その原因はわが国の状況にあるわ。われわれには本当に世間に訴えようがないのよ。

世間に訴えようと思つたら、あるものを使うより仕方がないじゃない。『ノイエス・ドイッチュラント』(ND)のあのドクターKの悪意ある記事に、どう答えるというのよ。中略

これはもうビーアマンの問題でなく、われわれの問題だわ。

中略

ラムベルツが要求する。声明は撤回してもらいたい。それがだめなら、少なくとも西側で行われている悪用には、署名者は組しない、という一文を加えてもらいたい。

フランク・バイヤー。おれは何も撤回しなぞ。たとえそれが、またこれから何年か映画が作れなくなつてもだ。

中略

クリスタ・ヴォルフ。われわれにもメンツがある。われわれの声明を『ND』にのせなさいよ。あれは穩やか

なものだし、すでに西側と距離を置くことは入っているし、この国で発表されなかった声明に、いったいどうやって補足みたいなものを書けっというの？

こうした党幹部と作家たちの遣り取りを読んでみると、ドキュメント類にはない雰囲気や息吹きといったものを汲み取ってもらえれば、とハイムの言うとおり、<sup>⑥</sup>当事者たちの息遣いといったものまで聞こえてくるような気がするではないか。

『怪文書』のフィニーの手下たちのように、ここでは党組織に動員されて、党にとって都合の悪い作品の上映、上演、出版を妨害しようとする「サクラ」たちが登場するのは昔も今も変わらない。わが国では「サクラ」といえば、芝居の役者に同調して場を盛り上げるとか、商人と結んで囲りの客の購買欲をそそる役をする、というのが普通だが、とはいえ右翼の街宣のように妨害したり、あるいはほめ殺しをしたり例もあるから、一概にはいえないが、要するにこの体制では、わが国とは逆の働きをする「サクラ」が動員されるのはDDRの人々にとって常識である。この体制の「サクラ」は、わが国の右翼の街宣のようなものだとする、「同じツラは見たくねえ」とクルークの熱り立つのも、わかるような気がするではないか。同じく何千通もの厳しい手紙がきているというのも、その中には多数の「サクラ」が混じっているのである。だから「いつまでもおまえたちを守ってやれないぞ」というセリフの裏は、「いつだって「サクラ」を動員しておまえたちを潰しにかかるぞ」という威し文句なのである。シュレズインガーに「ギョームみたいなのは一人だけじゃないぞ（つまり、スパイはいくらでもいるんだぞ）」とじんわり脅しをかけるやり方にも悪寒が走るではないか。そうした「サクラ」の例を、ひとつふたつ見てみよう。

断片六一。<sup>⑦</sup>ドキュメント。

ヘルムート・ザコウスキー

何人かの才能ある作家たち、俳優たちが、その偉大な芸術を私は称賛してきたが、ピーアマンと連帯して影響を及ぼそうとするのが正しいことだと考えた。かれらがよりによって、われわれによからぬことをしようと考えてる連中に、自分らの名をこっそり漏らして、よきことをなそうと思った、と信じるのはつらいことである。かれらがそれを望んだにせよ、望まなかったにせよ、われわれに敵対する連中といっしょになってことをしたのだ。かれらを信奉している大多数の観衆は失望しているし、すべての西側の放送を通じてかれらの名が叫ばれ、反コムニズムとDDRに敵対する“証人”として利用されているのを聞かなければならないのは、大変残念なことである——食べさせてもらっている者のことはほめるものだ——

ハリー・テュルク

食べさせてもらっている者のために歌は歌う。DDR当局は、ピーアマン氏が歌を歌ってやっている連中の所で、メシを食うことができるようにあえて取り計らってやったのである。われわれはこれに大賛成である。

この二人の作家は体制御用作家として有名であるから、これを読んだ者は苦笑いしたことだろう。二人がそろいもそろって同じセリフを口にするとは、食わせてもらっている者の堤灯持ちをしているのは夫子自身ではないかと。自分は詩人・歌手ではないから、歌は歌っていない、とでも思っているのだろうか。あるいはまた、それに気づか

ぬほど愚かではないだろうから、こうして事あるごとに、自分の忠誠心を党中央に表明せねばならない御用作家と  
いうのも、なかなかつらい立場にいるのだと、同情的に解釈すべきなのであろうか。

次はいよいよホーネツカーとの交渉の場面である。ハイムのヘルムリンからの聞き書きであるから、接続法の  
間接話法で書かれている。

一月二二日 月曜

断片六八。<sup>⑧</sup>

中略

ビーアマンは帰国が許されるのか、許されるとすればいつか、との質問に対し、ホーネツカーは、ノーだと返  
答。そのノーはいつまで続くのか、四週間か八週間か、との質問に対し、ホーネツカーは笑って、もちろん政  
治には決してノーはないが、近い将来の帰国は完全に無理だ。ところで自分自身は政治局で国外追放に賛成し  
た。少数派はビーアマンを監禁するのに賛成だったが、自分としては長いこと監獄にいたので、詩人や作家を  
投獄するのは避けたい。もともと人間的心情、人道的な行刑に賛成であり、君（ヘルムリン）も恐らく気付  
いていると思うが、ウルブリヒトの失墜以来、死刑判決は執行されていない。

ホーネツカーは、作家たちの書簡のことは遅くなって、つまり一月一七日の夕方六時に知ったことを残念がっ  
ていた。その時にはもう西からの報道が入っていたのだ。しかし撤回は君からも求めない。だが、フォルカー・  
ブラウンとユーレク・ベツカーが撤回した、という知らせをすでもらっている。ヘルムリンが、そんなこ  
とは信じたくないと言うと、ホーネツカーは、ベツカーの撤回については同志ハーガーから聞いたと断言した。

ベツカー「ホーネツカーの所に行ったのはいつからですか？」

ヘルムリーン「およそ二時半だ。」

ベツカー「だがぼくは三時になってからハーガーの所へ行ったんですよ。」<sup>⑧</sup>

中略

最後にヘルムリーンはホーネツカーに、ユーレク・ベツカーの提案を伝えた。ベツカーはビアマンと親交があるから、自分が西独へ行つて、国外追放の決定の取り消しを政府ができるようにするには、場合によっては何ができるか、ビアマンと相談してみよう、と申し出たのだ。ホーネツカーは、自分は何もベツカーの西独行きに異存はないが、すでに言ったように、政府がその処置を引込める可能性は、ごくわずかだと思ふ、と答えた。

中略

結局のところ、事態がどう進展していくことになるのか、誰にもわからない。(フリッツ・クレマーからフォルカー・ブラウンにいたるまで、最初の署名人の誰一人後退した者はいなかったし、百を上まわる芸術家や学者たちの追加署名がやってきたそうだ。誰もその完全なリストは持っていないし、個々人が自分の署名をどうやって公けにするのか、誰も知らないまだほかのリストが回っているのかもわからない。

中略

断片六九<sup>⑨</sup>

もちろん、これはコップの中の嵐だともいえるだろう。(中略)だがしかし、より大きな発展の一部と見るこ

ともできる。それはモスクワの第二〇回党大会に始まり、戦争がなければ、社会主義の真の民主化に通じるかもしれないのだ。

インゲは言う「有名人にはかれらはきつと何もしないでしよう。だけどたいしたことのない人、有名でない人のことが私は心配だわ。」

これを読むと、『怪文書』の鑑定人が言うように、なるほどホーネツカーの人柄がゴドルフィン卿に反映されていなくも無いと思えるが（ゴドルフィン卿は、この日、通風で苦しんでいたが、女王陛下の政府がこのように多くの文学上の不愉快事があったからといって、文士たちをそのような方法で（絞首台で吊す）処分するほど無分別ではない、と口をはさんだ<sup>⑩</sup>）、そしてハイムがよくホーネツカーという人物を把握していたからこそ、現実に「人間の心情、人道的行刑に賛成だ」とのせりふが吐かれる八年前に同じようなせりふを書くことができたといえる。

問題はしかし、トップが人道的人柄だということが冤罪されるようなところにあるのではない。ハイムがいみじくも言っているように「比較的小さくはあるが、しかし比較にならないほど強力なグループ」<sup>⑪</sup>のところでは、人間が問われない。つまり党政治局自体には人格はない。人道がすつ飛んでしまうのである。ここでいったん事が決まると、あとはいわゆる「社会主義的道筋をたどる」<sup>⑫</sup>ことになる。つまり機構が一人歩きを始めるのである。この機構はヒエラルヒー、ピラミッド型であるから、下にいくほど事は徹底されてくる。インゲの言うとおり、ヘルムリーンやハイムは逮捕されないが、かけだしの作家や詩人、無名の人々は、かれらに連帯の署名をしたということだけで、逮捕されたり、党を除名されたり、職場を失ったりと、機構の末端ではされほうだいになる。

これをDDRというコップの中の嵐と見るか、社会主義の真の民主化に通ずる大きな発展の一部と見るか、どちらが正しいのか。

七六年一月二日の「シュピーゲル」第四八号には、すでに一〇月始めには、政治局がビーマンの処置について、二つの可能性を検討していたことを報じている（断片八六）。<sup>⑬</sup>つまりひとつはビーマンを国家侮辱のことで告発、有罪判決を下す、ただし保護観察処分にする。もうひとつは永久に国外追放にする二案である。結局一六日火曜日の朝、後者に決めたが、かれらが思い出すのは五六年のハンガリー、六八年のチェコスロヴァキアの経験であり、ソ連外交筋はこうした微妙な状況の原因を、党と政府の長ホーネツカールのコンセプションの無さに見ている。「党路線はゆれている。ビーマン追放は重大な不手際だ」とかれらの一人は批判している。

この四八号が西の店頭に出たのが、（ヘルムリーンとホーネツカールの会見のあった同じ二二日月曜日とすると、政治局の内部事情とソ連の態度についての情報が「シュピーゲル」の編集部に事前に、遅くとも二人の会見以前の一日木曜日にはもたらされていたにちがいない。一九日編集の締め切り日だからである。とすると、これはもう厚かましい一人の歌手の問題、あるいは一ダースの抗議声明を出した作家たちの問題ではない。われわれは非常に大きなチェス盤上の非常に小さな駒にすぎないのだ（断片八七）。<sup>⑭</sup>

この時期、ソ連筋はホーネツカールの更迭を考えていたとの情報もあるので、<sup>⑮</sup>「シュピーゲル」への親ソ派からの意図的なリークも考えられないことではない。要するに権力内部の主導権争いに、ビーマンや作家連中が巻き込まれたのだ、と解釈できなくもない。外部に敵をつくり、国民の階級的本能に訴えて、国民の結束を計ろうとホーネツカール派が考えた、とするのは常識であろう。

しかし、こうした争いを続けているうちに、ますます社会主義の威信は堀り崩されていくのである。「エイブラハム・リンカーンの考え方がわたしは好きだが、かれはあるときこう言った。一部の人びとをずっと馬鹿扱いすることはできるし、すべての人びとを一定の時間馬鹿扱いすることもできるが、すべての人びとをずっと馬鹿扱することはできない、と」<sup>⑩</sup>とハイムが「ミンスクの退屈」で引用したのは一九六五年のことである。

その馬鹿扱いに堪忍袋の緒を切らして、マンフレート・クルークは「何年かたてば、コムニズムは、今日なお避けて通ることのできぬものと見なされている醜悪な特性を、とつくに脱ぎ捨ててしまっているだろう。その時人びとは今の権力者の何人かの名前を、ビーマンの歌の中でのみ知ることになるろう。(中略)おまえら騒ぐのはやめろ、人びとを煩わし、侮辱するのをやめろ、ヘビがウサギを見るようにおれたちを見るな、そいつはおれたちの体をこわすもとだ。間違った闘争心を煽りたてるな、ビーマンの怒りを産み出すようなことはやめろ、怒っている連中の中にだって新しい才能があるかもしれないんだぞ」(断片一二一)<sup>⑪</sup>と五ページにもものぼる憂さ晴らしを、ラムベルツの前にたたきつける。

これに対し、支配政党の政治局員、国の全メディアに対して権力を行使する男が何と言ったか。「もし誰か文化会館の館長が、もうおまえをうちの会館で歌わせるつもりはないといえば……」と言うのである。「クルークは笑った。胸の奥深くから吐き出すようなかれのものすごい笑いである。そいつは大いに結構なことじゃねえか。かれは同志ラムベルツにこう言った。わが国の一人の人間が、しかも文化会館の館長が、自分自身の意思を持つのを許さず、自分の意思で行動する、そいつこそがまさに肝心なことだったんだぜ——その館長がおれのがきらいだつてんなら、そいつの所で歌うよう招待してくれる必要なんてねえんだ。これが同志ラムベルツが平静を失った唯一

の瞬間だった。」(断片一三三)<sup>18)</sup>

ホーネツカーのクラウン・プリンスといわれた男が、この程度の応答しかできないとなると、先は知れている。かれが事故死した時、その死を残念がる者はそう多くはいなかったであろう。

断片一〇三。<sup>19)</sup> 作家同盟ベルリン地区黨員集会の決議

前略

われわれは、わが党組織の黨員ユーレク・ベツカー(他略)らが、ビーマンの件に関して帝国主義的報道機関を頼りとし、その結果客観的にわれらが敵の反コムニズム扇動に奉仕した行動を原則的に批判し、糾弾した。われわれはかれらにその反党的行動を修正することを要求する。

断片一三三、一三四。<sup>20)</sup> 党内資料「インフォメーション」七六／七七年一四六号

ビーマンの立場は従って、社会主義革命とプロレタリアートの役割の完全な無理解に基づいている。(略)かれは、(略)常に現実の社会主義と労働者階級の党を、ウルトラ左翼、トロツキスト的立場から批判してきた。(略)こうした事実をわかっているのになぜビーマンは出国の許可を与えられたのか、という質問がなされるなら、次のように断言することができる。すなわちそうすることによって、ビーマンの背後にひそんでいる勢力——ボーフムのイニシアティブ委員会や他の——反DDRに向けられた計画が暴かれ、ビーマンの事実上の役割が完全に明らかにされる、ということである。国籍の剥奪は従って、階級敵の共犯者に対する必要な措置なのである。こうした事実を知らずに、政治的な先見の明を欠き、あるいは単に間違って理解した“同

僚”との連帯感から、ピーアマンに肩入れせねばならぬと想っている例の作家や芸術家たちには（略）

断片一三六、<sup>21</sup> 党員集会でのユーレク・ベツツカーの態度表明

ピーアマンに対する国籍剥奪を歓迎し、ないしは是認するどんな決議にも私は署名できない。この政府の決定を拒否することが、作家たちや彫刻家クレマーの自覚的な書簡に私をして共に署名させたのであり、これまでこの私の拒否の態度を弱めることは何ひとつ生じなかった。

階級敵のメディアをわれわれの書簡の公表のために使ったことを間違いだと私は認識しているかどうか？ いや、これを間違いだと見做すつもりはない。もしこちらで発表するか、あるいはあちらで発表するか、という選択肢があったとすれば、西側の報道機関に頼ることなど馬鹿げていると思ったことだろう。だが問題は、意見の相違を公表するか、あるいは内部で検討するか？であった。私の経験からいえば、“内部で検討する”というのは、わが国ではふつう“隠蔽する”と同義語なのである。従って私は世間に訴える措置を擁護する。そしてこれは私の確信によれば不可分のものであるが、世間に訴えることは結局のところいつも世界に訴えることなのである。

内部で検討するにしていずれにせよ遅すぎたのである。NDがすでに国籍剥奪の決定を腹立ちまぎれの、私に思うに極めて党を傷つけるやり方で、この国籍剥奪を理由づける論説とやらんで公表してしまったあとでは、内部で検討する、ということは、そのような重大な結果を招く決定の前に、党指導部の同志たちと、そのような決定に対する抗議を予測できた同僚や同志たちの間に協議が行われる、という点にありえたであろう。そうならず、そのかわりに党規律の発動が、またもや自明のことと考えられたこと、そのことがわれわれの今

日の状況の本当の原因である、と私は思っている。<sup>18)</sup>

問題は恐らくふたつにしばることができよう。ひとつは党の決定に異議を申し立てたこと、ふたつ目は、そうした党内事情を外部の敵の手にもらしたこと、である。

だがこの二点に関しては、すでに一二年前の六四年にハイムが、批判を呼び起こした「スターリン退場す」において、はつきりと批判していることを忘れてはならないだろう。

「解決の鍵は、恐れることなく討論することにある。何でも言い合える討論をし、自明に思えること、すでに確定しているように見えることをも疑ってみることだ。とりわけ社会主義の分野で、大きな論争となっている中心的な問題、一方でやんごとなきところの決議をたえまなく疑い、教条といえどもたえず疑うことを要求している革命的民主主義と、他方で、服従を要求し、指令を無条件に遂行することを要求する革命的規律の間の矛盾を取り上げることだ。」<sup>19)</sup>

「コミュニケーションの手段が、今日のように発達してきていると、その議論は社会主義に必ずしも好意的でない人びとの耳にも達するであろう。それゆえ、議論のテーマを西側の新聞編集者や宣伝担当の者たちに、材料を提供しないものに制限しようとするなら、実際には、あらゆる議論、あらゆる批判を締め出さねばならないだろう。フルシチョフはソ連共産党第二〇回党大会の席で、あの有名な演説を決して行つてはならなかったし、ルイジ・ロongoは、故パルミーロ・トリアッティの遺言状を決して公刊させてはならなかったはずだ。問題を公言しないという戦術、味方の害になる議論はするな！という要求は、本当のところ、いかなる対策も講ぜず、煮えたぎっている

鍋の蓋の上にこわごわながら座り込んでいる保守派の手段のひとつにすぎない。」<sup>23</sup>

要するに、問題はこの批判につきている。にもかかわらず、一〇年たつてもこの問題を解決できていないところに、SEDという党の病理が潜んでいるのだ。かれらは不安であり、自信がない。つまり自分らの権力が形式的には九八パーセントの支持があるとはいえ、獲得したのではない与えられた権力を維持しているにすぎない、という権力を正当化する感情に敏感にならざるをえない。あらゆる正当なる批判はそこを刺激する。

そして一九七〇年代という科学と技術の革新の時代に、相変わらず階級敵に奉仕するな、などという時代遅れのスローガンに固執し、技術も思想も何もかも世間の水準からはるかに遅れてしまっている事実自ら気がつかなかった。ただ活発に機能していたのは、党内ヒエラルヒーに基づく官僚主義的機構マシーンにすぎない。かくて「社会主義がとりわけ没落していったのは、どんな議論も、存在する諸問題との対決をも阻止したからである。すべてがチーズの中に保護されていて、その後ただ悪臭を発した」<sup>24</sup>にすぎないことになってゆく。

こうして自立した批判的思考の持ち主たちはSEDから次つぎと除名され、あるいは脱党し、クルーク、ライナー・クンツェ、ギュンター・クーネルト、ザラー・キルシュらの一大エクソダスが始まり、DDRの文化シーンは荒廃していくが、SEDは自らの決めた文化政策にこだわり続け、七九年にはとうとうハイムを、小説『コリン』を西側で出版したかどにより、しかも文学や言葉とは関係のない外為法違反で九千マルクの罰金刑に処するという、誰が見ても姑息な処置しかとれないところへ、自らの威信を貶めていく。

そして見よ、その一〇年後、ハイムの言う「言葉の働きというのは、むしろ人間の心の中に閉じ込められ、しばしば数年後になって、思いもかけず爆発的に現われてくる間接的な働きではないのか」<sup>25</sup>との言葉どおりに、それら自

分の眼で見、自分の頭で物事を考えた多くの人びとの言葉が積み重なり、ついに爆発してベルリンの壁を崩壊させ、DDR自体を消滅させていったのはつい最近のことである。そういう背景を持つ、この『われらが不満の冬』は、独裁権力の不気味さと、それに抗する人びとの心意気を、ごく短期間の叙述であるとはいえ、生なましく感じさせ、歴史の一瞬を鮮やかに切り取って見せたという点で、また作者ハイムの巧みな構成もあって、多少とも事情をしる者にとっては大変興味深い作品となっている。

## 注

- ① Der Winter ..., S.41.
- ② Fragmente, Wege und Umwege. S.276.
- ③ Der Winter ..., S.65ff.
- ④ ebd. S.67.
- ⑤ ebd. S.68ff.
- ⑥ ebd. S.15.
- ⑦ ebd. S.75f.
- ⑧ ebd. S.79ff.
- ⑨ ebd. S.82f.
- ⑩ 『怪文書』一〇九頁。Wa. S.229.
- ⑪ Fragmente, S.275.

- ⑫ Der Winter ... , S.82.
- ⑬ ebd. S.93f.
- ⑭ ebd. S.94.
- ⑮ 「ブーアマン事件以後（上）」三四頁以降。
- ⑯ Die Langeweile von Minsk. Wege und Umwege. S.295.
- ⑰ Der Winter ... , S.127. u. 129.
- ⑱ ebd. S.130.
- ⑲ ebd. S.111.
- ⑳ ebd. S.142f.
- ㉑ ebd. S.146f.
- ㉒ Stalin verläßt den Raum. Wege und Umwege. S.291.
- ㉓ ebd. S.292f.
- ㉔ Regina General/Wolfgang Sabath. Stefan Heym. Elefantent Press 1994. S.71.
- ㉕ Die Langeweile von Minsk. S.296.

## 七

『怪文書』と『われらが不満の冬』という二作品を取り上げてみたが、片方がフィクション、片方がノン・フィ

クシヨン、片方が一八世紀の英国社会、片方が二〇世紀のDDR社会主義社会を扱ったもの、といった風に、その形態上の違いを言いたててもあまり意味はない。形態上の違いはあっても、ハイムの場合と同じひとつこと、すなわち現代の政治的社会を批判的に取り上げ続けているのである。言ってみればこの両作品は、作家ハイムのふたつの経歴、すなわち作家としての一面と、ジャーナリストとしての一面とが、コインの表と裏となって現われたにすぎない。『怪文書』で作家としての面が、『不満の冬』でジャーナリストとしての面が強く刻印されているもの、文字通りシユテファン・ハイムのひとつの作品なのである。かれの場合、あまりジャンル分けは意味がない。要するに主題はひとつ、政治なのであるから。両作品に即していえば、片方でありうる政治を、片方であった政治を、つまり空想と現実という形で描き出したともいえよう。片方が六八年に書かれ、片方が七六年に書かれているから、その間わずか八年である。六八年に思い描いていた現実が八年後に、これほど醜悪な現実として実現するとは思っていなかったにちがいない。それはすでに見たように、『不満の冬』の結びの言葉に現われていた。

ギユンター・ガオスと違って、人間が変わりうることを信じているハイムは、<sup>①</sup>『怪文書』の描き出した現実から、政治家も何かと学ぶところがあつただろうと思つたのも無理はない。自分でもよほどの自信作と考えているようで、この『怪文書』のことは折にふれて語っているのも、当局によってさらし刑にされたデフォーが、自分の「さらし台賛歌」の朗読されるなかを、市民の歓呼を浴びて勝利する、と言うイメージに、自らを、といわないまでも、第一一回中央委員会総会以降DDR当局によって理不尽な批判にさらされてきた作家、芸術家たちを重ね合わせて見ているからにほかならない。

ガオスとの対談で、文学というものが、現実世界とは別の、もっとわかりやすい、もっとリアルな虚構の現実

まで高められることによつて、人びとを現実の変革へと唆すのだ、と言っている。<sup>②</sup>また文学は理性にも影響をあたえ、思考を刺激するが、まず第一に感情を生むことによつて、それよりもはるかに人を感動させる、とも言っている。<sup>③</sup>

確かに文学は、現実をわかりやすいものにしてくれるが、それが即、現実の変革へ唆す、というのには、何かもうひとつ説明不足のような気がしないでもないが、そこにユーレカ！なるほどそうか！という人の情感に訴える感動という要素を入れてみると、俗に表現すれば、そうか、じゃおれもひとつやってみるか！という気持ちにさせられることがつまり、現実への変革へ唆される、ということなのであろう。

そうした虚構の現実の高みにまで達して、今日のわれわれにまで影響を及ぼしている例としてハイムは、シェイクスピアの『リチャード三世』を挙げているが、そうした文学のあるべき姿にぴたりと合い、その文学が客観的現実として姿を現した成功例が、『怪文書』なのである。かれはこの物語を、ジョージア・クリーチなる人物の手記というスタイルで書いているが、「これを英語で、デフォアの英語で書いた。かれの作品を研究した際に、かれの言葉を自分のものにした結果、そのトーンとリズムはおのずと筆に表われ、そのうえわたしが自分でやったドイツ語への翻訳にもそれはにじみ出るようになった。そして見よ、オクラホマ大学の歴史学者のある教授が、わたしに手紙をよこして、ジョージア・クリーチのオリジナル原稿のフォト・コピーを貸してもらえないだろうか、と言ってきたのだ。(略)これでわかるように、文学は、まぎれもない大学教授が、虚構の作品を歴史的ドキュメントと思い込むほどの、それほどの現実度に達したのだ」と誇らしげにハイムは語っている。<sup>④</sup>

確かにこの作品には人を感動させるものがある。DDRの現実を想って、作中の市民たちと同じく快哉を叫んだ人もいたであらう。

ところがDDRでは、DDRに限らず社会主義圏の文学に要求されてきたのは、党中央で決定された政治的諸問題に解決を与え、その解決を吹聴することだった。つまり主題とその解決方法および宣伝の問題である。主題がどんなに優れていても、その解決の手法、宣伝がまずければ、人の感動は呼べないし、手法、宣伝がどんなにうまくても、主題がありきたりでわかりきったものならば、これまた人は白けるばかりである。社会の典型を描け、といわれても、人間は手本どおりには動かないし、その手法がいわゆる社会主義リアリズムでは、「スターリン退場す」のト書きに「偉大な」という形容詞が本人の手で書き込まれるようなリアリズムでは、ブレヒトの言う「ミンスクは、世界一退屈な町のひとつだ」とは書けないし、人は感動しないのだ。この単に「スターリンが退場する」と書けること、「一番退屈な町だ」と書けること、つまり本来のリアリズムを妨げるものが、社会主義のタブーなのである。従ってそうしたタブーがある所では、『怪文書』は書けない。『怪文書』はそうしたタブーを打ち破り、主題と手法の巧みさが見事に一致したからこそ人の感動を呼び、状況の変革へと唆されるのである。

こうした「言葉に内在する、行動を発生させる」という特性は、この世の権力者をして、作家、知識人、インテリを、尊敬と不信の入りまじった感情でながめさせる。この感情は、一方でメダル、賞金、アカデミーの聖職が雨あられのごとく行政的に乱発されることに現われ、他方で、経済的圧力や恐怖、もしくは両方を手段に使う検閲に現われる」とハイムが書き、<sup>⑤</sup>第一一回中央委員会総会でホーネツカーに批判されたのは六五年のことであった。そして早くもその年の一月二二日には、内務省二九一号室に出頭せよ、との内務大臣からの召喚状が届く。ハイムは要注意人物になったのである。そして『怪文書』は、当局に対する大胆不敵な挑戦状と見なされ、シュタージの目をさらに引きつけただけでなく、一〇年後のビーアマン事件の遠い引き金となり、『われらが不満の冬』を書かせ

しめた遠因ともなった。こう考えると、ハイムの文学歴のみならず、DDR文学史においても忘れてはならない作品なのである。最後に『不満の冬』の証言を引用して、この論を終えることにしたい。

「一九七六年ヴォルフ・ビアマンの国籍剥奪は、DDRに『現存社会主義』の終末を予兆するかののような内部危機を引き起こした。シュテファン・ハイムの、この時期の手記は、胸の締めつけられるような、スパイ、心理テロそして威嚇のメカニズムを暴いているが、また同時にDDRの知識人たちの、変革のはるか以前の抵抗ぶりの見事な一例でもある。独裁という条件下での勇氣と市民の勇敢さの一例であり、論議を呼び起こす政治的教材のひとつである。」<sup>⑥</sup>

## 注

- ① Dichtung und Wirklichkeit. Gespräch mit Günter Graus in Gravenbruch. Einmischung. C. Bertelsmann 1990. S.97.  
 ② ebd., S.90f.  
 ③ ebd., S.93.  
 ④ ebd., S.95f.  
 ⑤ Die Langweile von Minsk. S.296f.  
 ⑥ Der Winter ..., S.2.